

# トラツグミ 英: Eurasian Scaly Thrush, White's Thrush

## 1. 分類と形態



写真1. 左:トラツグミ(三木敏史撮影). 右:オオトラツグミ.

### 分類: スズメ目 ヒタキ科

※国内にはトラツグミ *Z. d. aurea*, オオトラツグミ *Z. d. major*, コトラツグミ *Z. d. iriomotensis* の3亜種が生息する(日本鳥学会2012). オオトラツグミは独立種とみなされることもあり(石田・樋口 1990, Clement & Hathway 2000など), ユーラシア大陸に分布する亜種も含めた分類の再検討が必要である.

	トラツグミ	オオトラツグミ	コトラツグミ
翼長(mm)	155.0 (149.5-165.0)	164.5 (158.5-171.0)	145.1 (144.3-145.8)
尾長(mm)	95.1 (89.0-109.8)	120.3 (107.0-125.5)	93.0 (92.0-94.0)
ふしよ長(mm)	32.9 (29.5-34.5)	42.8 (41.0-44.7)	34.5 (33.5-35.5)
露出嘴峰長(mm)	25.5 (23.0-27.0)	28.0 (21.3-30.2)	24.8 (24.0-25.5)
体重(g)	—	190.9 (170.0-216.0)	—

※3亜種の各部の計測値. 平均値(最小-最大)を示す. トラツグミ(N=16)とコトラツグミ(N=2)はNishiumi & Morioka(2009), オオトラツグミは筆者による計測値(N=37, ただし尾長と体重はN=35, 露出嘴峰長はN=18).

### 羽色:

雌雄同色. 上面と翼は黄褐色で, 黒いうろこ状の斑がみられる. 下面は白地に黒い三日月形の斑が密にある. 尾羽は暗黄褐色で外側は黒っぽく先が白い. トラツグミに比べ, オオトラツグミは上面が暗めでうろこ状の斑も大きく, 全体的に暗く感じられる. また下面の白地も黄褐色味を帯び, 腹部が汚れたように見える. トラツグミは腹部の白色がより鮮やかな印象である(写真1). 上尾筒の模様も異なる(写真2). コトラツグミはトラツグミより上面の茶色味が強く, うろこ状斑の幅も狭い. また外側の尾羽の白い部分がほとんどない.

写真2. トラツグミ(上)とオオトラツグミ(下)の尾羽および上尾筒. トラツグミの尾羽は14枚, オオトラツグミは12枚. トラツグミの上尾筒の羽縁の模様は羽軸が白いため三日月形に見えるが, オオトラツグミは羽縁と羽軸が黒いのでイチオウの葉のような形に見える.



### 鳴き声:

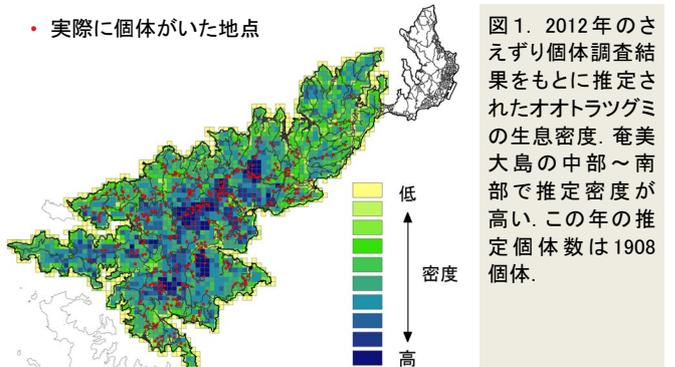
トラツグミは夜間に「ヒョー」と口笛のような声で鳴く. 平安時代, これは「ぬえ」という化け物の声と考えられていた. オオトラツグミはこれと全く異なり, 「ツィー, キョローン」と抑揚のある澄んだ美しい声で, おもに繁殖期の早朝にさえずる. オ

トラツグミの警戒声は「チーイ」, 「ゲツ」, 「グワッ」など. コトラツグミの鳴き声は不明.

## 2. 分布と生息環境

### 分布と生息数:

トラツグミは, 国外ではロシア, 中国, 朝鮮半島, 国内では北海道から大隅諸島にかけて繁殖する. 北海道では夏鳥, 奄美群島以南の琉球列島では冬鳥. 他の2亜種より分布域が広く, 生息数も多いと考えられる. オオトラツグミは奄美大島に留鳥として生息する. 加計呂麻島にも生息すると述べた文献もあるが, 同島での確実な観察例はない. 生息数は未発表のデータであるが1500~5000羽程度と推定されている(図1). コトラツグミは西表島に生息するとされているが, 1984年1月に窓ガラスに衝突して死んだオス成鳥以降, 記録がない. 環境省レッドデータブックでは情報不足となっており, 生息確認の調査が急務である.



### 生息環境:

3亜種とも森林に生息する. オオトラツグミは林齢の高い広葉樹林を好む. 餌となるミミズが多いことがその理由の一つであると考えられる(Mizuta 2014). オオトラツグミはあまり平地に下りないが, トラツグミは奄美大島以南の越冬地では平地でよく見られる. このためトラツグミはしばしば窓ガラスに衝突する. オオトラツグミの衝突は確認されていない. コトラツグミの生息環境は不明だが, 1月の窓ガラスへの衝突例から冬期は平地にもいることが示唆される.

## 3. 生活史

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
トラツグミ	繁殖期					非繁殖期						
オオトラツグミ	繁殖期					非繁殖期						

※コトラツグミは不明.

### 繁殖システム:

オオトラツグミは一夫一妻. 他の2亜種も同様と考えられる. オオトラツグミでは, 抱卵はつがいの一方の親(おそらくメス)のみが行う. もう一方は抱卵個体に餌を運び, 抱卵個体が巣から離れる際は巣にとどまる. ヒナがかえると抱卵していた個体は抱雛に専念し, もう一方がヒナに餌を運ぶ(写真3). 巣内育雛期の後半になると抱雛個体もヒナへの給餌を行うようになるが, その頻度は低い.



写真3. オオトラツグミの子育ての様子.

Amami Thrush(亜種オオトラツグミ) 学: *Zoothera dauma*

生態図鑑

## 巣:

オオトラツグミは木の枝や着生シダの中、岩棚などに、大量のコケを使って外径20cm、高さ12cmほどの大きなお椀型の巣を作る(写真4)。高齢林には営巣に適した太い木や着生シダが多く、これも高齢林を生息環境として選好する一因であろう(Mizuta 2014)。巣の高さは平均3.3m(0.4~11.5m, N=69)。トラツグミの巣の形状や材質はオオトラツグミとあまり変わらないようである(清棲1978)。コトラツグミの巣の確認例はない。

写真4. オオトラツグミの巣。左上: 木の枝の股, 右上: 折れた枯死木の幹の上, 左下: 着生シダ(シマオオタニワタリ)の中, 右下: 岩棚。



## 卵:

オオトラツグミの一腹卵数は2~3卵(Mizuta 2014)。卵色は白に近い青白色から薄い褐色、赤茶色まで幅がある。大きさは長径37.8mm、短径26.3mm(筆者による1卵の計測値)。トラツグミの一腹卵数は3~5卵、卵色はオオトラツグミと大差ないが、大きさは長径33.7mm、短径23.5mmで(清棲1978)、オオトラツグミより少し小さい。

## 抱卵・育雛期間, 巣立ち:

筆者が調査しているオオトラツグミの抱卵期間は約16日間、巣内育雛期間は14~16日間。繁殖が確認された34巣のうち、1羽でも巣立ちに至った巣は19巣で、単純計算では巣立ち率は56%。ハシブトガラスによる巣内ピナの捕食が目撃されており、捕食が繁殖失敗の主要因であると考えられる。また抱卵期間中に巣の近くで林道工事が始まり、親が巣を放棄してしまった例もある。希少種の生息域での工事には配慮が必要であることを示す一例である。

## 4. 食性と採食行動

オオトラツグミのヒナへの給餌を観察すると(11巣, 計581回)、ミミズが78%を占め、ヤスデやムカデ、鱗翅目の幼虫などミミズ以外の餌はわずか3%であった。残る19%では給餌物が確認できなかったが、そこにもミミズは含まれていると考えられる。成鳥の食性はほとんど記録がないが、写真家の常田守氏は、成鳥がハゼノキ、ホソバムクイヌビワなどの実を食べるのを観察している。日本大学の佐々木和音氏と三谷奈保氏が成鳥の羽毛の安定同位体比を分析したところ、ミミズと植物質のもの両方を食べていることが示され、常田氏の観察を裏付ける結果となった。

## 5. 興味深い生態や行動, 保護上の課題

## ● 保護の取り組み

NPO法人奄美野鳥の会は、絶滅が危ぶまれていたオオトラツグミの個体数とその変動を知るため、1994年から奄美

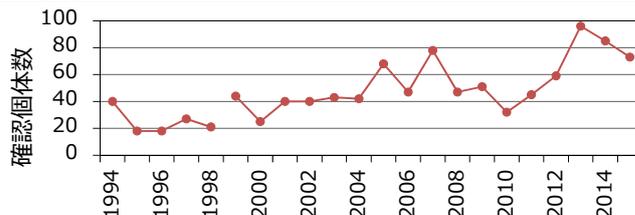


図2. オオトラツグミさえずり個体一斉調査で確認されたさえずり個体数の経年変化(奄美中央林道沿い約42kmの調査ルートでの確認数)。NPO法人奄美野鳥の会のウェブサイトに掲載されたデータと2015年の調査結果より作成。中央林道沿いを同じ手法で調査をしている1999年以降とそれ以前を分けて示している。

大島の中央部でさえずりの数を数える調査を開始した。1999年以降は100名を超えるボランティアが全長42kmに及ぶ林道を歩く「オオトラツグミさえずり個体一斉調査」に発展し、これは現在も続いている(奄美野鳥の会 2008)。この調査によると、2000年代半ば以降、確認数は徐々に増加傾向を示している(図2)。1990年代に個体数が少なかったのは森林伐採の影響と考えられ(Sugimura 1988を参照)、近年の個体数の回復は伐採の減少に伴う森林の回復によるところが大きい。

奄美大島を含む琉球列島は、現在世界自然遺産登録を目指しており、環境保全の気運が高まっている。現在は絶滅危惧種であるオオトラツグミも、このまま生息地が守られれば絶滅の心配は少ない。とはいえ、今後も個体群の動態を見守っていく必要がある。

## 6. 引用・参考文献

- 奄美野鳥の会. 2008. オオトラツグミ *Zoothera (dauma) major* のさえずり個体数の変動(1999~2007). Strix 26: 97-104.
- Clement, P. & Hathway, R. 2000. Thrushes. Christopher Helm, London.
- 石田健・樋口広芳. 1990. オオトラツグミ *Zoothera dauma amami* の形態と分類. 平成元年度特殊鳥類調査. Pp. 65-78. 日本野鳥の会, 東京.
- 清棲幸保. 1978. 日本鳥類大図鑑 I. 講談社, 東京.
- Mizuta, T. 2014. Habitat requirements of the endangered Amami Thrush (*Zoothera dauma major*), endemic to Amami-Oshima Island, southwestern Japan. Wilson J. Ornithol. 126: 298-304.
- 日本鳥学会. 2012. 日本産鳥類目録改訂第7版. 日本鳥学会, 三田.
- Nishiumi, I. & Morioka, H. 2009. A New Subspecies of *Zoothera dauma* (Aves, Turdidae) from Iriomotejima, Southern Ryukyus, with Comments on *Z. d. toratugumi*. Bull. Natl. Mus. Nat. Sci., Ser. A 35: 113-124.
- Sugimura, K. 1988. The role of government subsidies in the population decline of some unique wildlife species on Amami Oshima, Japan. Environ. Conserv. 15: 49-57.

## 執筆

水田拓

環境省奄美野生生物保護センター  
自然保護専門員

奄美大島でオオトラツグミの保護増殖事業に関わり始めてはや10年。この間、オオトラツグミの個体数は増え、分布域も目に見えて広がっている。「もはや希少種ではない」と感じる反面、その生態はまだわからないことが多く、オオトラツグミとのつきあいはまだまだ続けたいと思っている。

